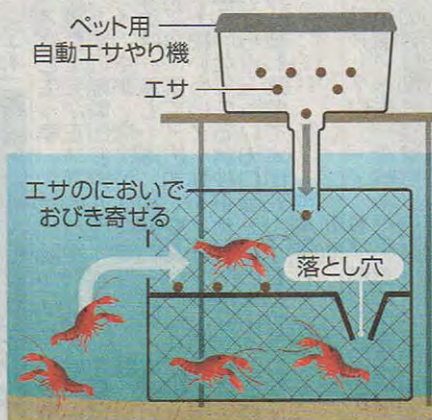




ザリガニ掃討大作戦

在来種復活へ新農導入

井の頭池に設置された最新の農



井の頭池でアメリカザリガニを捕獲するボランティアから。左に見えるのがペットのエサやり機を応用した「農」(22日、東京都立井の頭恩賜公園で)

池の水を抜く「かいぼり」で、外来種の駆除や水質浄化が進む東京・井の頭池で、「最後の大物」とされてきたアメリカザリガニが激減している。東京都などはこの約3年間で約4万匹を駆除し、今春からは、ペットのエサやり機を応用した強力な農を導入。環境保全に取り組む市民団体のメンバーらは「外来種の一掃に光が見えてきた」と期待を膨らませている。

東京・井の頭池

「かいぼり」は全国各地の公園や堀、ため池などでも広く行われている。環境省は2003年、09年、16年の3回にわたり、皇居の外苑で、外来種駆除や水質浄化のためにかいぼりを実施。同省の担当者によると、ブラックバスやブルーギルなどが減ったほか、悪臭を放つアオコの発生も抑制などに効果を上げています。岐阜大の向井貴彦准教授(魚類学)らのグループは、これまでに岐阜県関市の8か所のため

「水抜き」全国で実施

池で延べ10回以上のかいぼりを行い、外来魚を根絶に追い込んだ。一部の池では絶滅危惧種のウシモツゴやトウカイヨシノボリが定着した。ただ、駆除後も釣りや観賞のために池にブラックバスやコイを投げ込む人もいるといい、向井准教授は、「水草や在来種を守るため外来種を入れないように訴えても、なかなか理解してもらえない。地域に広く周知することが必要だ」と話している。

ガニやブラックバス、ブルーギルなど繁殖力が強く、濁った水でも生きられる外来種が外部から持ち込まれ、水草や在来種が大幅に減った。

都は2013年度以降、3度のかいぼりを行い、ブラックバスやブルーギルの根絶に成功。一方、底に穴を掘り、岩陰に身を隠すアメリカザリガニはかいぼりでは駆除しきれず、天敵のブラックバスが減って逆に増加リスクが高まった。

そうした中、都から駆除の委託を受けたNPO法人「生態工房」(武蔵野市)は、まずは暗がりをお好むアメリカザリガニの習性を逆手に取り、遮光シートをかぶせた網かごを池の中に設

1920年代に米国のエサとして飼育されたアメリカザリガニが、食用やペット用に持ち込まれた。食用やペット用に飼育された個体が逃げたり、捨てられたりして繁殖し、現在は全国の用水路や池などに生息している。在来種の昆虫や魚を食べ、水草をハサミで根こそぎ切るため、各地で水質悪化や生態系への影響を引き起こしている。

かごの下層部に封じ込める仕組みだ。エサは人手を介さずに供給できるため、継続的に捕獲できるといいます。生態工房の佐藤方博事務局長(46)によると、一連の外来種駆除で、井の頭池は現在、多くの在来種が生息し、水草も希少種が復活したという。特にツツイトモは目立って増え、水面を彩る姿は「モネの絵画のよう」と話題を呼んでいる。

佐藤事務局長は「水草を切ったり食べたりするアメリカザリガニは最後の壁。新しい農を駆除の切り札としたい」と話す。

井の頭公園は、来年度の東京五輪・パラリンピックで大型画面で競技を中継する「ライブサイト会場」に選ばれており、都の担当者は「多くの来場者に美しい水辺を楽しんでもらいたい」と話している。

井の頭公園は、来年度の東京五輪・パラリンピックで大型画面で競技を中継する「ライブサイト会場」に選ばれており、都の担当者は「多くの来場者に美しい水辺を楽しんでもらいたい」と話している。